

下閉伊北区域における環境配慮の取り組み

(独)森林総合研究所 森林農地整備センター 東北北海道整備局
下閉伊北建設事業所 田子 雅章

1. はじめに

本事業は岩手県沿岸北部に位置する岩泉町、田野畑村及び普代村の3町村を対象に、農用地総合整備事業下閉伊北区域として、面的整備は区画整理92.1haをはじめ暗渠排水、客土、土層改良並びに附帯する用排水改良を、線的整備は岩泉町から田野畑村を経由し、普代村まで総延長15.7kmの農業用道路を一体的に実施している。

本事業は平成14年度に着手し、今年度で完了となるが、ここに環境配慮の総括の意味も込めて、今までの取り組み事例を報告する。

2. 施工前及び施工中の環境調査

施工前の環境調査時点において、文献調査でイヌワシとチョウセンアカシジミ、現地調査でサクラソウ、ベニバナヤマシャクヤク、クワガタソウの他多数の動植物を確認したとともに、施工中にはモリオカシダレを確認している。

なお、イヌワシについては本事業着手前の平成12年から毎年、繁殖期を中心にモニタリングを行っている。



モリオカシダレ(平成22年4月)

3. 施工時の配慮

1) 環境情報協議会の設置

施工に当たり、平成14年度に外部の学識経験者等で構成する「環境情報協議会」を設置し、意見や助言を頂きながら事業を進めている。

2) イヌワシへの配慮

本事業の農業用道路の一部区間が、イヌワシ営巣地を中心とした行動範囲と重なることから、低騒音型施工機械の使用、施工機械取扱方法の見直し、工程の検討、騒音調査及び馴化(大型クレーン等の施工機械の存在や稼働に馴れさせる)を行った。

3) 植物への配慮

農業用道路計画路線上に確認されたサクラソウ、ベニバナヤマシャクヤク及びクワガタソウについては、環境情報協議会での意見を踏まえて回避するための路線線形の検討を行ったが、回避した場合に経済的に不利であること、また、近傍にある埋蔵文化財包蔵地との位置関係から車両の走行性も不利となることから、路線の修正を行わず、移植することにより対応した。また、チョウセンアカシジミの食餌木となるデワノトネリコについては、農業用道路の盛土法面に移植を行った。

4) 動物への配慮

区画整理や農業用道路の施工により改変された範囲に生息する動物の環境について

配慮を行った。具体的には、水路内の生息地を確保するための湾処、魚道及び魚巢、両生類他の水路外への脱出のための脱出パイプ及びはい上がり施設、水路設置により分断された生態系のネットワークを確保するための渡り板をそれぞれ設置した。また、施工範囲内に確認された湧水を利用しての小規模な池を設置し、生息環境を改善した。

5) その他

施工に当たっては、貴重な動植物が確認された範囲に不用意に立ち入らないための立入禁止措置や、作業員に対する環境配慮の周知徹底を行い、環境の保全に努めた。

4. 施工中のモニタリング

1) イヌワシ

平成22年に、平成12年からのモニタリング開始して以来、初めて幼鳥の巣立ちを確認した。このため、平成22年度環境情報協議会での委員からの指導を踏まえて、イヌワシの繁殖期以外についてもモニタリングを実施している。

2) 植物

移植した植物（サクラソウ、ベニバナヤマシャクヤク、クワガタソウ、デワノトネリコ）の生育は順調と判断できる。なお、サクラソウについては、平成21年度環境情報協議会の委員の指導により、サクラソウ保全地及びその周辺の草刈を行った結果、平成22年のサクラソウ開花時期に新たなサクラソウの生育を確認した。

3) 動物

環境配慮施設の湾処については、土砂の堆積を確認したため、個々の状態（動物の生育、土砂堆積量）を考慮して土砂の撤去を検討した。それ以外の環境配慮施設については、概ね所定の機能を果たしていた。

5. 地元への引き継ぎ

サクラソウについては、地域住民と一緒に環境保全活動に取り組み、活動の重要性の働きかけを行ったところ、「サクラソウを守る会」が発足してサクラソウの保全を行うこととなっている。

その他の環境の保全に配慮した取り組みについては、現在、地元に対して維持管理に関する引き継ぎのための説明を行っている。今後は更に、中山間直接支払制度を活用しての維持管理他の説明を行うとともに、維持管理に関する資料（維持管理シート他）の作成や環境保護啓発看板の設置を行う予定である。

6. おわりに

イヌワシの幼鳥の巣立ちを初めて確認することが出来たとともに、動植物については、その生息・生育環境を代償や移植という形で環境保全に配慮した取り組みを行い、順調に生息・生育していることを確認している。

特にサクラソウの場合は、地域住民が中心となってサクラソウを守る会が発足し、地域の活性化につながる段階に発展しており、本事業における環境配慮の取り組みは成功したと判断している。

今後、地域の特性を活かした環境保全活動が継続することを念願する次第である。